

研究結果報告書

所属：江原大学

役職：講師

氏名：李基原

本研究は近世日本思想史の中核に存在していた荻生徂徠（1666－1728）以後の思想史の展開を「反徂徠学」の立場から考察することを通して、「反徂徠学」が思想史に与えた影響を展望するものである。「反徂徠学」は特定の地域で生じた問題ではなく、江戸、京都、大阪など全国的な現象だった。本研究では、主に京都における「反徂徠学」の問題を扱った。京都で「反徂徠学」を最初に主張したのは、宇野明霞（1698 - 1745）と弟の宇野士朗（1701 - 1732）の「宇野家」である。「宇野家」は最初に徂徠学を学んだが、後に「反徂徠学」に転向し、徂徠を批判するようになった。

本研究を通して「宇野家の反徂徠学」の争点において、以下の点が明らかになったと思われる。

まず、最初徂徠学を学んだ「宇野家」が後に、徂徠学を批判し、「反徂徠学」に転向した理由である。宇野明霞は著書の『論語考』において、「学問の道」は「詩書礼楽を学び、天下国家を治めることにある」とする。この側面では、徂徠学と同じ立場に立っていたと言えるだろう。すると宇野明霞が徂徠学を批判したのは、徂徠の経書解釈の方法である「古文辞学」の問題にある。宇野明霞は『論語考』で「徂徠は字は知っていたが、辞は知らなかった」とする。徂徠は「文字」のみに拘って、「文章」の意味を知らなかったとするのである。これは徂徠の「古文辞学」の在り方についての批判である。

そして、宇野明霞は徂徠の人間理解にも問題を感じていた。徂徠は人間の「技」、つまり能力に重点をおいて判断した。徂徠は一人の人間が持っている能力を引っ張り出して、その長所を生かすことを重んじていた。しかし、宇野明霞は人間を「技」で判断するのではなくて、人間の「本性」の道德性を重んじていた。この点は徂徠と全く異なる人間理解である。

このような「宇野家」を支えてきたのは、門人である芥川丹邱（1710－1785）、服部蘇門（1724-1769）、龍草蘆（1714－1792）、大典顕常（1719-1801）、片山北海（1723－1790）などである。彼らは「宇野家」に従って「反徂徠学」へと転向した。特に 大典

頭常には「宇野家」の著書の刊行を任せられた。彼は朝鮮修文職に任命されるほど、幕府においても重要な人物であった。

また「宇野家」に即発された「反徂徠学」は、片山北海によって大阪へ広がっていた。片山北海は1764年、大阪へ移し、「混沌詩社」を結成し、大阪の「反徂徠学」を活性化していく。つまり京都から始まった「反徂徠学」は京都で終わったのではなく、大阪の思想史界まで広がり、関西地域の思想形成に大事な役割を果たしたのである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

李基原、「貝原益軒の『養生訓』から考える健康と幸福の指向点について」、明知大学人文科学研究所学術大会、2021、10.21。

李基原、「申維翰と荻生徂徠：1719年朝鮮通信使と徂徠との出会い」、東アジア日本研究者協議会、第5回国際学術大会、2021、11、26-11、28。

李基原、「伊藤仁斎の道德の行方」、韓国日本学会国際学術大会、2022、02、12。

許芝銀、「17-19世紀、朝鮮関連往来物の制作、流通、消費と日本庶民の朝鮮認識」、第41回、東洋史学会冬季研究討論会、2022、1、13。

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

李基原、「古義学から考える道德とその圏域－伊藤仁斎の『論語古義』を中心に」、『日本思想』41号、韓国日本思想史学会、2021、12月31日

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

なし。